

# 現在学研究

## 第4号

斬り合いの果て：『明治九年神風党暴動時刃創図』にみる……吉村 風（1）  
刃創と太刀筋

作られる女性性：「女らしき」は誰が作るか……倉石 美都（33）

保育園の年中行事……高久 舞（47）

円寂するイエ：「墓じまい」と「イエじまい」……天地 弘（59）

### ◆書評

上野誠著『万葉学者 墓をしまい母を送る』……倉石あつ子（74）

明治九（一八七六）年。磨乃令に反対した武士たちが、当時としても時代遅れになっていた、鎧・烏帽子に刀・槍という武装で、政府要人や軍の鎮台を襲撃する「神風連の乱」（神風連の變とも）と呼ばれる事件が起こった。事件の首謀者は太田黒伴雄、加屋齋賢、齋藤求三郎ら旧熊本藩士族である。彼らは敬神党（別名「神風連」）と呼ばれる集団を組織し、尊王攘夷を唱え、明治政府の洋化政策に反対するとともに、磨乃令の施行を武士の魂を奪うものとして憤り反乱を起こした。

―『明治九年神風党暴動時刀創図』概略―

―はじめに

明治九（一八七六）年。磨乃令に反対した武士たちが、

当時としても時代遅れになっていた、鎧・烏帽子に刀・槍という武装で、政府要人や軍の鎮台を襲撃する「神風連の乱」（神風連の變とも）と呼ばれる事件が起こった。事

件は、彼らは敬神党（別名「神風連」）と呼ばれる藩士族である。彼らは敬神党（別名「神風連」）と呼ばれる

集団を組織し、尊王攘夷を唱え、明治政府の洋化政策に反対するとともに、磨乃令の施行を武士の魂を奪うものとして憤り反乱を起こした。

本論文は、神風連が陸軍熊本鎮台を襲撃した際の、鎮台

―『明治九年神風党暴動時刀創図』にみる刀創と太刀筋―

吉村 風

兵の受傷状況を絵画で記した『明治九年神風党暴動時刀創図』（以下「神風連刀創図」と略す。）をもちに、乱における神風連の戦闘状況と実戦における日本刀の刀法（太刀筋）を検討するものである。

幕末・戊辰戦争を経て、戦地で負傷あるいは病気になる兵士をどのように治療・回復させるかという「軍陣医学」の需要がたかまり、その第一歩として兵士の受傷状況を記録する必要性が認識されるようになる。『神風連刀創図』は

兵士の受傷状況を絵で記録した最初期のものである。負傷兵の受傷状況を絵で記録することは、西南戦争で特に盛んとなり、『神風連刀創図』を所蔵する陸上自衛隊彰古館に

は、



年ごる作成と推定

・明治十年西南戦役外科図(明治十年六月から七月ごる作成)

といった傷兵の絵画資料が残っている。また明治三十三年(一九〇〇)年になるが八甲田山雪中行軍遭難事件では兵士の凍傷の状況が「凍傷者図」として記録され、明治天皇の天覧に供された。神風連の姿については、谷川健一「神風連の神慮と行動形態」や渡辺京二の『神風連とその時代』にみられるように乱の歴史的な評価や彼らの思想的な位置づけについての研究が中心となっており、彼らがどのような戦闘を実際に行ったかはあまり着目されてこなかった。

二 『神風連刀創図』と先行研究

彰吉館には、陸軍が大正七(一九一八)年四月の軍陣医学大会でこの図を展示に供した際の覚書が残っている。これは軍医監監石黒忠愷が記したものであり、神風連刀創図の作成意図と作成時期が記されている。これによる

・明治十(一八七七)年三月西南戦争の際に西郷隆盛ら

番号が振られているとともに、一図を除き、すべて負傷者の氏名を記し、図によっては兵士の所属部隊や階級も記されている。また、各図の裏面には、仮装丁以前の通し番号と所属・階級・氏名などが記されている。筆跡から判断するに、仮装丁時に植木が裏面の情報を表面に転記し、新しく通し番号を振ったものと推測される。

負傷兵によっては、複数の方向から負傷した事を示すため二方向より二図にわけて記載した例(人・6竹田、人・11大岡周知、人・35河添)や、治療の経過も含めて記載した例(人・13治、人・14小川洪)もあり、記録されている傷兵は全四十八名となっている。なお、神風連の乱による鎮台兵の被害は死者五十二名、負傷者七十二名、生死不明七十三名であるから、本図には鎮台兵の死者・負傷者のうち二四・三%の負傷兵が記載されていることになる。

本図は水彩・着色により描かれている。特徴としては、西洋画を学んだ五姓田らしく、刀創の状況や創面周囲の腫脹を写実的にとらえ、創によっては太刀筋が明確にわかる描き方になっている。また負傷による苦悶の表情や、負傷しても軍人らしく毅然とした顔つきになっている者など、表情を写実的に描いている。

一方、創傷の表現については

が熊本に近づいた際に、傷病兵は大阪の陸軍大阪臨時病院に移し、その際に石黒忠愷が五姓田芳柳(初代)に絵をかかせた。

・石黒は「刀創ノ大ナルモノハ蓋シ此挙ヲ以テ最終トス可シト」として、刀による負傷者が発生する最後の戦闘を記録することを目的として、絵の作成を命じた。『神風連刀創図』は西南戦争の負傷兵を描いた『明治十年西南戦役外科図』とセットとなる形で陸軍軍医学校の図書室に保管されていたが、次第に忘れ去られていった。そして明治三十二(一八九九)年には破棄寸前の状態で図書室の「大反故箱」入れられていたのを一等軍医植木弥三郎が発見することとなった。

それぞれ表紙の裏にはこの資料を反故箱から発見した一等軍医 植木弥三郎の文が記載されており、「西図を陸軍一等軍医の植木弥三郎が図書室の「大反故箱」より発見した。「当時の医務局長であった小池正直が「軍陣外科学上重要な資料と認め、仮装訂を行った」という経緯が記されている。『神風連刀創図』は表紙・裏表紙などを含めて全五十七葉、全五十五図となっている。仮装丁ということで表紙・裏表紙が付けられているが、製本はされていない。図には通し

・戦闘で当然発生すると思われる、擦過傷や打撲傷といった傷は描かれず、刀創のみが表現されている。

・写生の時期にはすでに癒着していたと思える傷でも、刀創はすべて傷口を開いた「哆開」の状態表現している。

・流血や体液の浸出などは表現せず刀創のみを表現している。

というように実際の受傷状況を模写するのではなく、刀創の状況を強調して伝えるための表現が行われている。また、先述の通り人・13治、人・14小川洪は、負傷後の治療の経過も書かれており、ある程度の期間、観察・写生が行われたことを示している。

現在のところ、本図と刀創について着目した研究は、「日本刀による創傷・明治9年神風突撃時刀創図の考察」のみである。『神風連刀創図』の刀創のうち頭頸部領域に受傷した傷について着目し、従来、刀創は切創と割創の中間であるときとされていたが、本図では創部分の組織減が見られず、切創とみる方が適切であるとした。

また刀創の太刀筋を斜走型・横走型・縦走型・不規則型・縦走型に分類し、頭頸部領域の創数二七のうち七四%の二〇創が

し、「実戦の基本刀法では垂直斬りはほとんどなく、左右の袈斬りが自然であるとされている。斜走する刀創が袈斬りあるいはそれに準じた刀法によるものと推察するならば興味深い」と刀創と太刀筋の関連性を示唆している。本文ではこの『神風連刀創図』にみる鎮台兵の受傷状況を材料として、

- ・神風連の戦闘がどのようなものであったか？
- ・受傷箇所と太刀筋から見た場合、刀創による戦闘はどのようなものであるか？

その上で先行研究の示唆をさらに発展させ、

- ・頭頸部領域以外の傷も含めた全体的な受傷状況の確認
- ・武器的な面から見て、受傷者がどのように攻撃をうけたかの検討

を行い、神風連の戦闘状況の詳細と、日本刀による戦闘がどのようなものであったかを明らかにしたいと考える。

### 二 神風連の武術流派・武装・戦闘概要

『神風連刀創図』は神風連が熊本鎮台を襲撃した際の鎮台兵側の負傷記録であるが、その分析を行う前に、神風連

谷源(四天流)、岩越内(雲弘流)、猿渡常太郎(寺頭流)の三名のみであるまた『近世名将言行録』では加屋賢も四天流を修めたとされる。以下、それぞれの流派について確認を行う。

四天流：明治期に漢学者村山冥冥が『四天流撃剣士二十五人姓名録序』を書き、神風連の乱ならびに西南戦争で同流の門第二十五人が亡くなったことを記している。残念ながらこの文は序のみで、二十五人の姓名を記した本編は散逸し、誰が四天流に属していたかは不明であるが、四天流は時習館の中でも師範が多く、参加者が四天流を修めた可能性は十分高い。

この四天流は「四天流組打」という柔術流派として現在も熊本に残っている。幕末・明治期までは柔術に加えて居合・二刀流の剣術も伝承していたが、居合や二刀流は現存しておらず、どのような特徴があったかは不明である。しかし寛政十(一七九八)年には、すでに防具竹刀を使用した他流試合の記録があり、その後九州を廻る武術家の廻りた他流試合に頻出する流派である。四天流は二刀流の技法だけでなく、比較的早い段階から竹刀・防具をつけて他流とも稽古を行い、現代の剣道に比較的に似た形式の稽古を行っていたと推測される。また『四天流撃剣士二十五人姓名録』

斬り合いの果て

### の武術流派・武装・戦闘の概要を確認する。

#### 三・一 神風連の武術流派

熊本藩には時習館という藩校があり、東西樹と呼ばれる建物で多くの武術流派が学ばれていた。この藩校は「知行取之子弟・中小姓之嫡子、凡士席以上者大中小身之無差別、時習館及両謝」可罷出候、尤心懸次第自身或可罷出候、一輕輩陪臣たり共抜群者、内贈承届罷出候様一申付候、農商茂右同断(宝曆四年十二月達文)という規定があり、「武士身分であれば誰でも「大中小身之無差別武術修行」ができる「心がけ次第では一輕輩陪臣でも参加でき、侍以外の身分でも同じである」として、身分を問わず広く稽古者を募っていたことで知られる。神風連の参加者はいずれも熊本藩の武士であり、この時習館に伝わっていた武術流派を訓練していたと考えられるが、彼らが何流を学んでいたかについては記録は少ない。

石原醜男の『神風連血涙史』では「武技に長じ(加屋賢)「長じて剛直文武の材を兼ね、特に騎射を能くした(上野賢吾)「幼にして文を山戸氏に武を塚本氏に学んだが荒木同(「括弧内は神風連の参加者)と彼らの武術の腕前を紹介しているが、流派についての明確な記載があるのは波

名録序」でも「撃剣」という呼び方をしていることも、その傍証となる。

雲弘流：これは江戸中期におこった剣術の流派であり、現在も熊本に現存する。この流派を昭和初期に調査した富永堅吾によると

- ・当流の稽古は簡で、複雑性はない。それは当流は相撃が主眼で、相手も殺して己も死ぬる建前で、掛引をしたり、技巧を弄したりすることを排して居る。
- ・左足を前に出し、両肘を側方に張って竹刀を右肩に担ぐ構えで、切先の高くない一種の八相が唯一の構え。
- ・面籠手をつけ、回流独特の袋竹刀相当の距離をもって相対する。上記の構えをとり双方とも気合い諸井走りかかつて相手の正面を打つという全く一本打ち、相撃ちを繰り返す。

という稽古を行う流派であつたとされる。

幕末・明治期も同様の稽古を行っていたかは不明であるが、特徴的な「切先の高くない一種の八相の構えをとる」ことは、現存する雲弘流の演武などでも確認をすることができ、

寺見流：猿渡常太郎の行った「寺頭流」であるが、これは熊本藩の藩校で教授され、やはり熊本に現存する「寺見流」

であると考えられる。現在、演武される型では、いずれも右八相から袈裟を斬る・請け流しで敵の刀を逸らして、最後に左袈裟を斬る。あるいは止めとして手首を切りつけるなどの技法を見ることができ。

以上、具体的な流派が判明する事例は少ないが、神風連の参加者は、時習館で教授されていた流派を稽古し、

・二刀流の流派(四天流)

・相撃ちを主眼とし、切先の高くない一種の八相の構え

をとり、相手の正面を斬る流派(雲弘流)

・右八相から袈裟を斬る・請け流しで敵の刀を逸らして、

最後に左袈裟を斬る。あるいは止めとして手首を切り

つける(寺見流)。

といった武術流派に所属していたことが推測される。

### 三二 神風連の武装

神風連は決起の際には、あえて銃や砲などの火器を廃し、

日本刀・槍・薙刀そして、焼き討ち用の焼玉のみで戦った

ことで知られている。彼らの主武器である日本刀について

は、戦前、神風連の刀の調査を行った前田稔晴が彼らの刀

八振りを確認している。

表1は前田稔晴が調査した一覧と、現在、神風連資料館

表1 神風連の刀一覽

種類	所持者	銘	長さ	状態	前田の所見
1 刀	石川運四郎	(表銘) 肥後國 高正通 / (裏銘) 旭日丸	2尺3寸5分	本造・行の棟・腰反り・生虫・備前風の匂出来乱れ。	・鍛冶は阪本高正(肥後の藩末の刀工、元幕士)・神風連の一人に宮本武平という人物があり神託をよくし、版本に鍛冶の方法として朝日の方向に向かって鏡を揮うという神託を下した。それが旭日丸の名前の由来となった(旭日丸の銘は宮本が入れた。)
2 刀	西川正徳	(表銘) 平造祐 / (裏銘) 馬居右衛門尉村西川稔助時師匠匠藤打彦盛	2尺2寸7分	本造・行の棟・大切先・反り1寸5分・鈍重く異風の匂り。	・先祖西川与助が天正12年5月豊原・小牧長久手の戦いで細川忠興に従って豊臣方として従軍。敵將佐藤利房を討った恩賞として下賜された刀。
3 刀	宮本寛十郎	(約) 豊州佐藤先	2尺3寸1分	備前で作り・振り上げ・目釘穴1つ・刃文小乱れの剛仕なるもの。	・平は天文頃豊後高田の一代鍛冶。戦国時代の突刃刀として未開物。四国徳島、筑前金刺兵衛、肥後國田原と同列。
4 短刀	富永守國		7寸9分	平造腕反り中直刃の上品なもの。	・廣台に斬り込む。背と腹に刀を捲えていた。腹の刀で斬りつけたのが敵の腕身に当たったとの伝承。背中に背負ったこの刀で理髪所りにしたとの伝承。
5 刀	太田黒伴	(約) 兼常	2尺4寸8分の大葉物	切先庭び縮高く刃文は直刃。	・拵えは半立ちつくりで、いかつい肥後調。拵は革で巻き細川家の家紋丸腫紋を打った赤銅の目具。要厚はせず。
6 刀	林田敏男	無銘	2尺3寸6分	本造・行棟・振り上げ目釘2つ・刃文は乱れ。	・出来銘は未開物か高田風。
7 刀	林田敏大	無銘	2尺2寸5分	刃文は乱れた飛び焼きなどあつてちよつと下品に見えるが切れ味は無類。	・拵えは小豆色巻り拵に拵は数層のこつみのもの。
8 刀	兼松許重	豊後高田藤行長			・刃こぼれが数か所。ハバキキ元8寸4分くらいのところから物打ちあたりにかけて縁の腫のようになって見える。
9 刀	本野貞雄	盛次	2尺3寸4分	本造り・行の棟・生虫、中心刃は卒落葉型。刃文細直刃の拵好良き刀である。	・古刀末梢の高田物。
10 刀	所持者不明				・拵えは半立ちつくりで、いかつい肥後調。拵は革で巻き細川家の家紋丸腫紋を打った赤銅の目具。要厚はせず。
11 短刀	骨太圓大				・高島参謀長への初太刀として首巻を受ける。筑前の刀工金剛兵衛盛次。

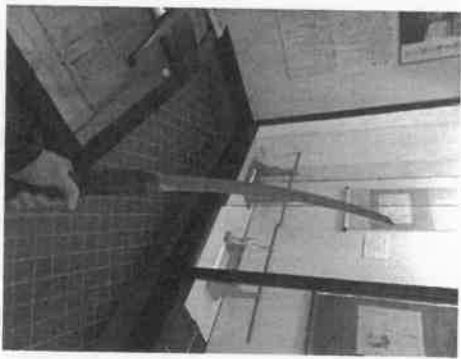


写真1 神風連の使用した刀の例(表1項使用頻や刃こぼれなどは見られず。)

種類	所持者	備考
10 刀	所持者不明	・神風連資料館蔵。 ・無銘・直刃。
11 短刀	骨太圓大	・刀身・拵と葉のみ残る。 ・刀身より1寸程度に二か所、刀身中央にもう二か所、二か所の刃こぼれあり。(切腹時に、骨に当たって欠けたか?)

に所有されている日本刀・拵を一覧にしたものである。これを見るとき、神風連は刀としては明和元年以降に製作された新刀を中心として使っている。長さは首領の太田黒が二尺四寸五分という比較的長めの刀を使っているが、そのほかは二尺三寸程度と一般的な定寸(二尺三寸五分)と呼ばれるカイズの刀を使用していることがわかる。前田はほとんどど名刀と称すべき位列の高いものは見なかったとしている。

次に、日本刀以外の、槍や薙刀といった長柄武器をとりあける。槍については子飼町にあった文武稽古所の武術師であった斎藤求三郎が磯野流の十文字槍の名手として知ら





図1 刀創図 49 (人-42 福本勇次)



図2 刀創図 41 (人-35 河添)

られ、乱当日も槍を振るって襲撃に臨んでいる。また、神風運資料館には青木唐太が明治九年に購入した守護槍が残っている。決起の直前にあえて購入したことから考えるに、これも実戦に持ち込まれたと思われる。しかし、日本刀以外の武器については、一部の参加者は槍・薙刀といった長柄武器を使用したことは確実であるが、全体像は不明である。

長柄武器やそのほかの武装については不明な点も残るが、神風運の乱における彼らの主武器は日本刀であり、『神風運刀創図』の武器も日本刀による傷であると考えられる。

### 三・三 神風運の乱の戦闘状況

次に、神風運の戦闘状況を整理する。彼らは新開大神宮神にて「空気比(うけひ)」と呼ばれる折衝・託宣を行い、「峰起すべし」という結果に従い、明治九年十月二十四日総勢一七〇名により蜂起し、熊本県令や熊本鎮台司令などの要人を暗殺する部隊と熊本鎮台を襲撃する部隊に分かれ行動を開始した。

要人暗殺部隊は五つの部隊に分かれ、熊本県令安岡良亮、熊本鎮台司令種田政明、熊本鎮台参謀長高島茂徳、歩兵第三連隊長宇倉知実、熊本県民会議長大田黒惟信ら五人の

た時点である。第三大隊は幹部の到着も早く、新式スナイドル銃と弾薬を拝領していたことから、歩兵宮到着後、即座に反撃を開始。刀槍しか持っていない神風運は対抗する手段はなく、一方的に銃撃されることとなる。

やがて、神風運の幹部の加屋露屋、斎藤求三郎が戦死。領袖の太田黒伴雄も銃弾を受け、熊本城法華坂より撤退。太田黒の傷は重く、途中の民家にて切腹。生存していた幹部や参加者は、自決する者、逃亡や再起を図って逃走する者などに分かかれ神風運は壊滅した。

以上が乱の当日の大まかな戦闘状況である。『神風運刀創図』は上記の戦闘のうち、熊本鎮台の砲兵營と歩兵營での戦闘により受傷した陸軍砲兵第六大隊・予備砲兵第三大

要人の標的とした。彼らは大田黒惟信と宇倉知実の暗殺に失敗したものの、安岡良亮や種田政明、高島茂徳の暗殺に成功し、その後鎮台襲撃部隊に合流する。

熊本鎮台襲撃部隊は砲兵營襲撃部隊と歩兵營襲撃部隊の二手に分かれて、熊本鎮台を襲撃した。砲兵營襲撃部隊は、砲兵第六大隊の砲兵營兵舎を奇襲。兵舎に焼玉と油で火を放ち、鎮台兵が兵舎から出てきたところを斬るという戦法をとる。砲兵營の鎮台兵は弾薬を弾薬庫に返納しており、武器を持っていなかっただため敗走することとなった。

歩兵營襲撃部隊は熊本城一の丸に位置する歩兵第三連隊の歩兵營を襲撃。第三連隊の第二大隊は当日、実弾の射撃訓練があったのを偶然返納せずに保有していたため、散発的に発射・防戦する。その他の隊は銃剣のみで対抗するも神風運に切り崩され圧倒される。

状況が変化するのは、要人暗殺部隊の標的のうち宇倉知実が襲撃を逃れたことによる。宇倉は自宅で襲撃を受けるが脱出。弾薬庫から弾丸を配布し体勢を立て直しを行った。鎮台兵側が射撃できるようにしたこと、神風運は次第に形勢不利となる。

神風運の敗北が最終的に決まったのは、城外、花畑町の熊本藩邸の歩兵第三連隊第三大隊が歩兵營の救援に到着し

### 四 神風運刀創図の受傷状況と太刀筋

#### 四-一 太刀筋の分析方法

『神風運刀創図』に描かれた太刀筋は、受傷箇所(傷の形状など)をもとに総合的に判断した。図1の背部の傷は肩の創が細く、背柱に近くにつれて創が大きくなっている。これは肩から刃先が入り、下方向に抜けた背後からの左袈と判断した。

図2は立て斬りのうち、右肩を上から下に斬った真向か、下から上に斬り上げた逆風か一見不明であるが、斬り上げであれば、図のように肩の上面に創が及び可能性は少ない(逆風の場合、斬りながら踏みこまない

と肩の上面には創をつけられな

表2 『神風刀創図』 状況と太刀筋一覽

編者 氏名*	刀創図編者 藤原・源隆	刀創図-1 大塚	刀創図-2 大塚	刀創図-3 少尉	刀創図-4 少尉	刀創図-5 少尉	刀創図-6 池田英六 大塚 源隆	刀創図-7 池田英六 大塚 源隆	刀創図-8 池田英六 大塚 源隆	刀創図-9 池田英六 大塚 源隆	刀創図-10 池田英六 大塚 源隆	刀創図-11 池田英六 大塚 源隆	刀創図-12 池田英六 大塚 源隆	刀創図-13 池田英六 大塚 源隆	刀創図-14 池田英六 大塚 源隆	刀創図-15 池田英六 大塚 源隆	刀創図-16 池田英六 大塚 源隆	刀創図-17 池田英六 大塚 源隆	刀創図-18 池田英六 大塚 源隆	刀創図-19 池田英六 大塚 源隆	刀創図-20 池田英六 大塚 源隆	刀創図-21 池田英六 大塚 源隆	刀創図-22 池田英六 大塚 源隆	刀創図-23 池田英六 大塚 源隆	刀創図-24 池田英六 大塚 源隆	刀創図-25 池田英六 大塚 源隆	刀創図-26 池田英六 大塚 源隆	刀創図-27 池田英六 大塚 源隆	刀創図-28 池田英六 大塚 源隆	刀創図-29 池田英六 大塚 源隆	刀創図-30 池田英六 大塚 源隆	刀創図-31 池田英六 大塚 源隆	刀創図-32 池田英六 大塚 源隆	刀創図-33 池田英六 大塚 源隆	刀創図-34 池田英六 大塚 源隆	刀創図-35 池田英六 大塚 源隆	刀創図-36 池田英六 大塚 源隆	刀創図-37 池田英六 大塚 源隆	刀創図-38 池田英六 大塚 源隆	刀創図-39 池田英六 大塚 源隆	刀創図-40 池田英六 大塚 源隆	刀創図-41 池田英六 大塚 源隆	刀創図-42 池田英六 大塚 源隆	刀創図-43 池田英六 大塚 源隆	刀創図-44 池田英六 大塚 源隆	刀創図-45 池田英六 大塚 源隆	刀創図-46 池田英六 大塚 源隆	刀創図-47 池田英六 大塚 源隆	刀創図-48 池田英六 大塚 源隆	刀創図-49 池田英六 大塚 源隆	刀創図-50 池田英六 大塚 源隆
-----------	----------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------

い。その場合、肩の上面の傷は深くなるため、真向であると判断した。

四・一 頻出する受傷箇所と太刀筋

表2は『神風連刀創図』の受傷箇所と太刀筋を一覽にためである。太刀筋は大きく立て斬り、斜め斬り、横斬り、突き4種類に分け、自分から見た上・下・左・右の方向と角度を組み合わせて表3のように分類を行った。

まず全体であるが、97箇所の傷の中、受傷箇所は三六・〇% (頭11、顔20、頸4計35創)と頭・顔・頸部に位置している。

ついで背(上)一六五% (16創)、肩一三四% (右肩9、左肩4計13創)・上腕一四四% (右上腕9・左上腕5計14創)・前腕及び手一三三% (右前腕4、左前腕5、右手指を含む)3、左手(指を含む)0計12創、足三一% (右足3、左足0計3創)、背(腰)一一% (2創)となっており、頭・顔・頸部を中心にして、上半身の受傷が多く、下半身の受傷は非常に少ないことがわかる。(表4)

上半身上部の受傷が多いという傾向は西南戦争の報告でも言われており、明治十年の陸軍臨時病院が神風連の乱と西南戦争全体の刀創と受傷箇所の比率を出した際も頭・顔・

上半身・腕といった箇所に受傷が集中していることが報告されている。

また、太刀筋と刀の走向であるが、斜め斬り三九二% (三八創)が群を抜いて多く、その次に立て斬り一四・四% (一四創)横薙ぎ一七・五% (一七創)突九・五% (九創)となっている。なお太刀筋不明は一九・六% (一九創)であった。(表3)

斜め斬りについては一九・六%が右上から左下に斜めに斬る左袈袂斬り(一九創)によるものとなっていて突出している。

上半身の上部の受傷が多い点と左袈袂斬りが多い理由についてまず考えられるのは、生理学的・解剖学的な緊張時における有効視野の狭窄である。興奮時・緊張時において有効視野は狭くなることは知られているが、これにより攻撃対象の下半身や脚部などは、有効視野の範囲外に出てしまい、一方、頭・顔といった上半身は視野に入りやすいため、攻撃が集中しやすくなる。また、下半身の攻撃は、攻撃の間、自分自身の頭部や上半身が空いてしまい隙となってしまう。隙に対する意識的あるいは無意識的な恐怖心や警戒心も、下半身の攻撃が発生しにくい原因と考えられる。

次に左袈袂が多い理由であるが、これも生理学的・解剖





Y-24	真名	刀剣図-28	砲兵第六大隊 第二小隊	1 顔	顔面、鼻から上唇まで欠損。(下顎は残存)	真向	体の右あるいは左側面から真向で頸部を阻む	
Y-25	森本眞致	刀剣図-29		4 頭	①頭部 左こめかみを縦に刺。 ②背筋、左肩、短めの刺。 ③背筋、右肩を右方向に斜めに刺。 ④背筋、中央、右より左下に三日挿入出不明	真向	①正面より左こめかみを真向で斬られる。 ②正面、または背後からの横突き。 ③背後より右袈装。 ④背後から左袈装斬り。 ※正面と背後二かかりで斬られた刺。	「明治10年7月3日特報、黒土峠、緑の越の戦いで死に。」 「長谷川歩兵第一聯隊長 森本眞致隊 (JACAR) ショア歴史資料センター」 「大日記 戦右の部 3月水陸軍省総務局 (防衛省防衛研究所) に記載あり。 明治13年3月時において、森本眞致が要であった事例。」
Y-26	加来	刀剣図-30	砲兵第六大隊 第一小隊	2 背(上)	①右手短、指指側から小指方向に刺。 ②背筋左肩横、骨が露出する横、終端部は下方向に垂む。 ③背筋左肩横、頸の体幹側は上方向に垂む。	大刀筋不明	①一次刀筋、正面から右手筋に横に腕手斬りを受ける。受傷者は右手を上げ、左手を右に保持。 ②体をひねって、左肩が前に出たので、背筋左肩を横に斬られる。 ※②の切り口は肩の骨で塞いがかまり割傷と至んだ刺となる。	・左手切りから連続で斬られた事例。
Y-27	今西	刀剣図-31		2 顔	①背筋右肩より右前腕長めの刺。 ②頸部から右横、頸の曲線に沿って刺。(刺の終端、頸の体幹側は上方向に垂む。)	右袈装	①背後右横より右袈装。②正面より頸を狙って突き。 ※背後と正面からの両方の刺があることから、2人以上と斬り合った可能性もあり。	・複数人に斬られた事例。
Y-28	奥山	刀剣図-32	歩兵第十三連隊 第二大隊 一中隊	1 顔	左こめかみから、眉毛上部で額方向に刺。 上方に右鼻、右鼻、頬、口まで	右袈装	左横打ちで入った刀が、横面打ちで手の握を突え、喉の面斬り(真向)に変化した。	・古流の面斬りの事例 ・なおこの刺については真向の面斬りを受けた刺につけられた可能性もあり。
Y-29	塚本	刀剣図-33	歩兵第十三連隊 第一大隊 一中隊	1 左肩	前面、左肩、横骨より左上腕にたつて刺。	右袈装	左肩を前に出したところを正面より右袈装されたか、あるいは左側方から真向左袈装。 ※正面からの右袈装と推定。	
Y-30	宮崎	刀剣図-34	歩兵第十三連隊 第二大隊 一中隊	2 顔	背後、左肩甲骨、背柱側と左腕側を刺し、 肘口の刺は赤く腫脹。肘出口は記載なし。(背骨刺と推測される。)	銃刺	背後からの流れ弾にあつたこと。 真門を抜けていることからまっすぐ銃弾が入つたものと推定。	・背後からの流弾に当たった事例。

Y-17	氏名※	刀剣図番号	陸隊・部隊	1 背(上)	背筋右肩より左腕部、頸部に近い付	左袈装	背後から左袈装。 ※刺が頸部近くまで行っているので、切り上げではないと思われる。	
Y-18	持田金太郎	刀剣図-22	砲兵第六大隊 第二小隊	4 顔	①右横から右項(うなじ)にかけて左斜めに刺。 ②背筋右肩口より肩甲骨まで左斜めに刺。 ③背筋左腕部、横に短い刺。 ④背筋中央、左より横一文字に背柱を突いた長い刺。	左袈装×2	①右側面から、左袈装で斬られたか。(顔にも刺があることから、切り上げてはいないと思われる) ②背後より左袈装斬りによる刺 ③背後より右袈装の刺 ④背後より右袈装の刺	・山庭温泉にて治療。(録書簡)
Y-19	深見武蔵	刀剣図-23	歩兵第十三連隊 第二大隊 第一中隊 伍長	1 顔	左耳から左頰を欠損。	真向	真向の面斬りが外れて、耳介と頰を斬る。	・山庭温泉にて治療。(録書簡)
Y-20	持田	刀剣図-24	砲兵第六大隊 第一小隊 隊卒	2 顔2	①左こめかみから左頰、鼻の右脇、U字を描くように刺。 ②左頰下の短い刺。	左袈	①左こめかみに斬りつけて手のうちを変化させたものと推定。 ②は不明。	・古流の面斬りの事例。
Y-21	岡部善一	刀剣図-25	砲兵第六大隊 第二小隊 隊卒	1 顔	左眼から左耳、左頰に曲線を突きながら刺。 左眼下の短い刺。	大刀筋不明	・大刀筋不明。 左側から横突きまたは正面からの右斬り上げた刺につけられた可能性もあり。 山庭温泉にて治療。(録書簡)	
Y-22	小林真光	刀剣図-26	砲兵第六大隊 第二小隊	1 背(上)	背筋横一文字に短い刺。(背柱を越えたと長い刺。)	横挿入出不明	背後から深い横突き。 横挿入出不明	
Y-23	藤田	刀剣図-27	子爵砲兵第三大隊 第一小隊	1 背(上)	背筋、背柱の右側斜方向に刺。	真向	背後より真向に斬ったのが少しおれた。	



表3 太刀筋の分類

真向	自分から見て、上から下に垂直に斬る。
立て斬り	自分から見て、下から上に垂直に斬り上げる。
立て入出不明	立て斬りだが上下どちらに斬ったか方向がわからないもの。
右袈裟	自分から見て、左から右方向に斜めに斬る。
左袈裟	自分から見て、右から左方向に斜めに斬る。
右斬上げ	自分から見て、左下から右上方向に斜めに斬り上げる。
左斬上げ	自分から見て、右下から左上方向に斜めに斬り上げる。
斜斬り	右斜入出不明 右方向の斜め斬りだが上下どちらに斬ったか方向がわからないもの。 左斜入出不明 左方向の斜め斬りだが上下どちらに斬ったか方向がわからないもの。
右薙ぎ	自分から見て、右から左方向に真横に斬る。
左薙ぎ	自分から見て、左から右方向に真横に斬る。
横薙入出不明	横薙ぎだが左右の方向がわからないもの。
突	刀の切っ先から突くもの。
太刀筋不明	太刀筋が不明なもの。また掌など受傷した箇所が可動域が大きく、縦斜横突いずれも不明なもの。

表4 受傷箇所の割合

受傷箇所	頭	顔	頸	胸	腹	腰(前部)	背(上)	背(腰)	右肩	左肩
割合	11	20	4	2	0	0	16	2	9	4
刀剣(97割)中の割合	11.3%	20.6%	4.1%	2.1%	0.0%	0.0%	16.5%	2.1%	9.3%	4.1%

受傷箇所	右上腕	左上腕	右前腕	左前腕	右手(指を含む)	左手(指を含む)	右足	左足	腕部
割合	9	5	4	5	3	0	3	0	2
刀剣(97割)中の割合	9.3%	5.2%	4.1%	5.2%	3.1%	0.0%	3.1%	0.0%	(除外)

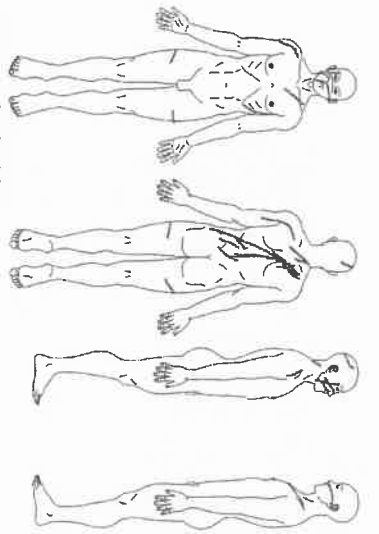
表5 太刀筋の分類

太刀筋	立て斬り				斜斬り				横薙				太刀筋不明		
	真向	逆風	出不明	出不明	右斜入	左袈裟	右斬上	出不明	右斜入	右薙	左薙	横薙入	出不明	突	腕部
太刀筋(総数)	14	0	0	10	2	19	3	6	4	7	9	19	2		
割合	14.4%	0.0%	0.0%	10.3%	2.1%	19.6%	3.1%	6.2%	4.1%	7.2%	9.3%	19.6%	(除外)		

とした。

※本表では、歴史資料でもあり受傷者の医療記録でもあるという本資料の性格を鑑み、  
・寸書ならびに経歴調査により他資料の記載が判明した人物については氏名を記載。  
・寸書やその他の者は寸書のみを記載

番号	氏名※	刀剣番号	受傷箇所	受傷状況	太刀筋分類	太刀筋考察	備考
A-43	豊井藩 豊秋・部隊	刀剣図-50 歩隊第一十隊 本隊第一十隊	腕部	左ひざより左腕部。こみみは 鋭めに肩を刺し黒い穴となつて いた。	1 頭	右ひざより右腕部、腕切りにてなく 右袈裟	
A-44	藩	刀剣図-51		右ひざより右腕部、腕切りにてなく 右袈裟	1 頭	右ひざより右腕部、腕切りにてなく 右袈裟	
A-45	藩本	刀剣図-52 歩隊第十三隊 本隊第二大隊		①右腕部から右ひざより右腕部まで 右斬上 ②左腕部から腕切りにてなく 右斬上 ③右腕部から腕切りにてなく 右斬上	3 頭	①右腕部から右腕部まで 右斬上 ②右腕部より左腕部、腕切りにてなく 右斬上 ③太刀筋不明	
A-46	竹下屋	刀剣図-53 馬屋橋		右腕部、腕切りにてなく 右袈裟	1 右足	太刀筋不明	
A-47	奥山政守	刀剣図-54 馬屋橋		①右ひざより右腕部まで 右斬上 ②右腕部は深く、やや左方向に流れ った傷での刺。	2 頭	①右ひざより右腕部まで 右斬上 ②右腕部より右腕部、腕切りにてなく 右斬上	・元治10年3月9日西郷隆盛本隊城下の 陣取り。 ・元治9年陸軍軍士隊(明治9年陸軍軍士隊)
A-48	高見	刀剣図-55		①右ひざより右腕部まで 右斬上 ②右腕部は深く、やや左方向に流れ った傷での刺。	2 頭	①正面より右腕部で腕を斬られる。 ②正面より右腕部で腕を斬られる。	「原山の戦い」で死す(田原坂遺跡)



別図1-1 (左袈裟)

別図1は右袈裟の受傷箇所を图示したものである。左袈裟の受傷箇所が比較的右肩から左へと集中するのに対し、右袈裟はばらけた受傷箇所となっている。また創長も短いものとなっている。敵に左袈裟で斬りかかると逃げられ、

・右袈裟

別図2は右袈裟の受傷箇所を图示したものである。左袈裟の受傷箇所が比較的右肩から左へと集中するのに対し、右袈裟はばらけた受傷箇所となっている。また創長も短いものとなっている。敵に左袈裟で斬りかかると逃げられ、居合の状態から直接斬りかかった場合、左から右への右薙ぎ(右こめかみへの切り付けも含む)か、頭部への右袈裟を鞘に納めておくメリットがほとんどないことか一つ。また鞘は自分の腰の左側に差すものであり、刀を鞘に納めたれる。これはまず、攻撃・奇襲側が神風連の側であり、刀八相で相手に斬りかかったケースが多かったことも推測される。襲撃したのではなく、はじめから抜刀し右二段あるいは右また、襲撃の際は、居合のように鞘に刀を納めた状態でい左袈裟が多usedされたものと考えられる。わかるが、闘争の興奮・緊張状態において、まず振りやす

学的な要素から説明が可能である。日本刀は右手を鐙側、左手を柄側を持つことを標準とする。この持ち方で、刀を自然に振り上げると、右二段や右八相など顔や頭部の右側に刀を持つてくる構えが自然となる。熟練度によっても異なるが、刀を頭部や顔部の左側に構える(左八相)と、目の前に右前腕が来て視野を塞ぐため、多少の慣れが必要になるためである。そして右二段あるいは右八相に構えた場合、右上から左下に振り下ろす左袈裟の方が自然と振りやす



図3 刀創図 -42 (人-36 西村)

・真向

別図1-3は真向の受傷箇所を图示したものである。真向は頭部・顔面に受傷が集中していることが見える。真向の場合、体幹や手足を切るより、剣道の面斬りのように頭部・顔面を狙って斬りかかったものと考えられる。肩に受傷しているものもあるが、創長は袈裟斬りなどに比べると短い。頭への面斬りを試みたが、外れて肩や鎖骨を斬ったものだと思うられる。また図4のように傷によつては体の側面から真向で斬られ、鼻から口を斬られるケースもあった。

二の太刀の右袈裟で創を与えたケースが多いものと考えられる。

図3は正面より左袈裟斬りを受けたものである。鎖骨から胸郭のあたりを、まさしく僧侶の袈裟掛けの状態に斬っている。確証をとることはできないが、寺見流や雲弘流の止めの左袈裟を思わせる急角度な太刀筋であり、斬撃のすさまじさを語っている。

・左袈裟

別図1は左袈裟斬りのみの太刀筋を图示したものである。左袈裟は最も受傷数が多く、一九・六%が左袈裟となっている。受傷箇所は背部に集中し、右肩から左腰部まで切り下ろす形に受傷している。また創長も他の太刀筋に比べると長くなる傾向がみられる。

四-三 太刀筋ごとの受傷箇所

次にそれぞれの太刀筋ごとにその受傷箇所を見てみよう。別図は神風連刀創図の各面から、受傷箇所を人体図に落とし込んだものである。

斬りといった左から右方向の斬り方が発生しやすい。しかし『神風連刀創図』では右斬り上げ斬りつけは三・一% (三創)、左から右への右薙ぎは六・二% (六創)のみと低い数値となっていることから、大多数はすでに抜刀した状態で襲撃したと推測される。



図4 刀創図 -28 (人-24 買名)



図6 刀創図-16(人・14小川洪)



図7 刀創図-24 (人・20織田)

た事例である。上腕部の狭い範囲に沿って平

図8は右肩から上腕部に平行した傷を受け

・二刀流による太刀筋

太刀筋だということができる。

られるのは、古流における特徴的な面斬りの

人・20織田、人・28興山、人・38立川)も見

は不明だが、この斬り方が四例(人・14小川洪、

か、それともこの技を使う流派の傾向なのか

れる。この斬り方が同一人物の手によるもの

ため顔を斬って相手の戦意を奪うにどめられたと思わ

る技だと考えられる。何かしらの理由で、あるいは乱戦の

来、顎まで斬り下げたのち、そのまま首を突いて止めどす

たかは不明だが、これらの斬り方を行う理由としては、本

である。後者は避けたために浅くなったかあえて浅く斬っ

を変え、斜め切りから縦切りへと刃の方向性を変えたもの

前者は、顔を切りながら、途中で刀の握り方(手の握)

る。

で斬ったものを左方向に顔をそむけたためについた創であ

わり、顎の方へと顔を切り裂いている。また図7は、真向

の横面に類似の斬り方)で入った刀が、途中で縦方向に代

図6の面斬りは、左の耳より右方向へ左横薙ぎ(剣道

の横面に類似の斬り方)で入った刀が、途中で縦方向に代

わり、顎の方へと顔を切り裂いている。また図7は、真向

で斬ったものを左方向に顔をそむけたためについた創であ

見ることができる。

一方、現代剣道ではまず使われない、特徴的な太刀筋も

・古流の面斬り

ことができる。

のように複数人と対峙した例は人・27(今西)などを見る

ていることから、複数人と対峙したものだと思われる。こ

右前腕と四か所を斬られている。前面と背中両方を斬られ

なお、図5の人物(人・6竹田)は背中・左前腕・頭・

ができる。

竹田、人・11大矢周知、人・41大坪など計四例をみることに

る技が使われたことが読み取れる。同様の太刀筋は人・6

の流派のものであるかは不明であるが、現代剣道にも通じ

る技が使われたことが読み取れる。同様の太刀筋は人・6

の流派のものであるかは不明であるが、現代剣道にも通じ

る技が使われたことが読み取れる。同様の太刀筋は人・6

の流派のものであるかは不明であるが、現代剣道にも通じ

る技が使われたことが読み取れる。同様の太刀筋は人・6

の流派のものであるかは不明であるが、現代剣道にも通じ

る技が使われたことが読み取れる。同様の太刀筋は人・6

の流派のものであるかは不明であるが、現代剣道にも通じ

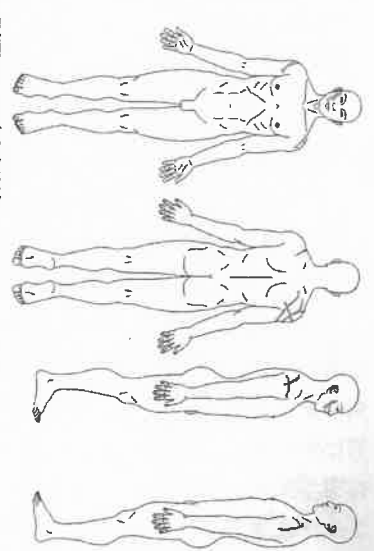
四・四 流派の技としての太刀筋

一方、いくつかの図の中には、流派の技ともいえるべき特

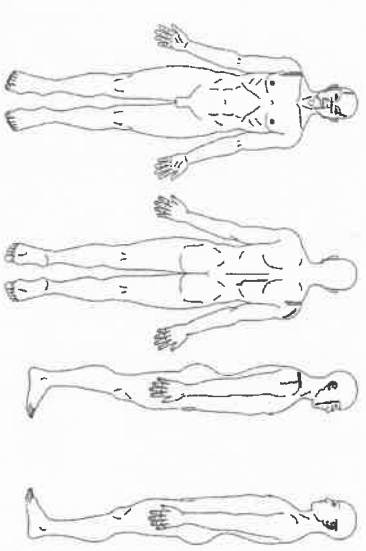
徴的な太刀筋を見ることができる。

・籠手面技

剣道では小さく素早く敵の手を斬ったあと、続けざまに



別図1-2(右袈装)



別図1-3(真向)



図5 刀創図-37(人・32久保田)

面を斬るは籠手面 籠手張面と呼ばれる技がある。図によ

てはそれを思わせる太刀筋が記録されている。

図5はその一例である。①右手拇指上側から甲にかけて

浅く(拇指は残存)籠手斬りを行い、そのまま反射的な動

きで正面から①右袈装で右の頭頂部付近を攻撃。また右鼻

背脇より下顎まで顔を斬ったものと思われる。この技がど

く(拇指は残存)籠手斬りを行い、そのまま反射的な動

きで正面から①右袈装で右の頭頂部付近を攻撃。また右鼻

背脇より下顎まで顔を斬ったものと思われる。この技がど

く(拇指は残存)籠手斬りを行い、そのまま反射的な動

きで正面から①右袈装で右の頭頂部付近を攻撃。また右鼻

背脇より下顎まで顔を斬ったものと思われる。この技がど

く(拇指は残存)籠手斬りを行い、そのまま反射的な動

きで正面から①右袈装で右の頭頂部付近を攻撃。また右鼻

背脇より下顎まで顔を斬ったものと思われる。この技がど

く(拇指は残存)籠手斬りを行い、そのまま反射的な動

きで正面から①右袈装で右の頭頂部付近を攻撃。また右鼻

背脇より下顎まで顔を斬ったものと思われる。この技がど

く(拇指は残存)籠手斬りを行い、そのまま反射的な動

きで正面から①右袈装で右の頭頂部付近を攻撃。また右鼻

背脇より下顎まで顔を斬ったものと思われる。この技がど

く(拇指は残存)籠手斬りを行い、そのまま反射的な動

きで正面から①右袈装で右の頭頂部付近を攻撃。また右鼻

背脇より下顎まで顔を斬ったものと思われる。この技がど

く(拇指は残存)籠手斬りを行い、そのまま反射的な動

きで正面から①右袈装で右の頭頂部付近を攻撃。また右鼻

背脇より下顎まで顔を斬ったものと思われる。この技がど

く(拇指は残存)籠手斬りを行い、そのまま反射的な動

きで正面から①右袈装で右の頭頂部付近を攻撃。また右鼻

背脇より下顎まで顔を斬ったものと思われる。この技がど

録は残っていないが、歩兵中佐の大島邦彦が青木磨太と古田十郎ら複数の神風連の参加者と斬り合いとなった。大島は元佐賀藩士で剣の達人として名高く、複数を相手に一歩も引かず戦い、斬り合いは膠着状態に陥った。そこを首領

・生還できる刀傷  
 気をつけなければいけないのは、ここに描かれた創傷は負傷者であり即死者の創は描かれていない点である。別図2は『神風連刀創図』のすべての図の刀創の受傷箇所を人

・同士討ちの銃創  
 『神風連刀創図』はすべて刀創であるが、図9の一図のみ、銃創による傷が描かれている。銃創は背部の右肩甲骨付近に二か所あり、鎮台兵による射撃が誤って、味方にあっ

た可能性は高い。  
 流と関連する二天一流などにも見られ、四天流でも使われ

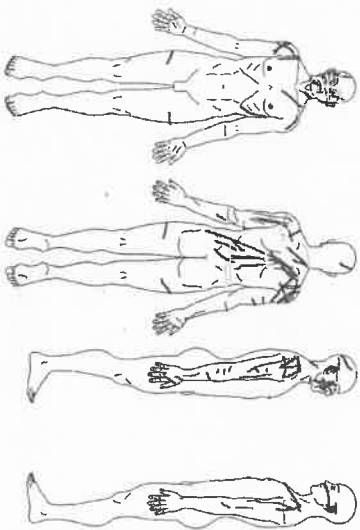
行に創を付けることは、一刀でつけられたと考えるより、二刀流によるほぼ連続した斬撃により受傷したと考える方が自然である。この創は二刀流を使った四天流の太刀筋であると考えられる。二刀で連続して斬りつける技は、四天



図8刀創図-7 (人-7松井)



図9刀創図-34 (人-30宮部)



別図2

留まった盲管銃創と推測される。受傷者は熊本歩兵第十三連隊の所属であり、真円に近い形で銃弾が入っている(真後から肩甲骨に当たっている)ことから、遠方からの狙撃による流れ弾ではなく、体勢の立て直した際に誤って近くの味方の銃弾が当たったものと思われる。当時の混乱状態を物語る図である。

太田黒伴雄みすからが、大島の胸を突き殺したという伝承が残っている。これらの例に共通するのは、「複数人で襲撃し、反撃が困難な状況で突きが使われている」という状況である。  
 突きは成功すれば致命傷となる創を与えられるが一度突いたら抜かねば次の攻撃ができない「突きをさらされる。あるいは躲きられると、自分自身に隙がでやすい」「逃走する相手を追いかけるが突くのは難しい」ことから、複数人数で斬りかかる、または不意を襲うなど、相手の抵抗を奪った状態でないと使にくい技であると考えると考えられる。

『神風連刀創図』に描かれた太刀筋に突きが少ないのは、突きによる受傷が即死となるためだけでなく、小人数(神風連)で多人数(鎮台兵)を追いかける戦闘状況であったためとも考えられる。  
 ・斬られた者のその後  
 敗走したときれる鎮台兵であるが、負傷者の中には抵抗のあとが残る防創創が残っているものがある。図10では左前腕部前面に沿って、右前腕部、前面に腕に対して直角に創傷をうけている。これは襲撃を受けた際に抵抗をした防創創だと考えられる。



「露ばかりの利害打算もなく、滔々たる歐化の大勢に向かつて直進し、玉砕していった」というように、勝敗を度外視した、非戦略的な行動故に尊い精神性であるものとして評価されてきていた。

しかし『神風連刀創図』で明確に読めるのは、神風連が日本刀を武術という技術をもって使いこなし、敵を殺傷し闘争に勝利しようとした姿である。

石原麟男は、神風連が銃火器を使わず刀槍のみをもって乱を起こした点について、神風連の領袖の一人、上野堅固と同志のやり取りをもとに以下のように紹介している。

「上野堅言はさすがに一党の元老、頻に長兵の利を説いて火器を用ひようと主張したが壮年の同志は耳も仮さぬ。『神風の兵器はわが神軍に要はない。』と口々に排斥して聴かせぬ。唯刀槍のみ執つて起つことにした」

ここでは「神風の兵器はわが神軍に要はない」というイデオロギイ的な理由から銃器を執らなかつたことが記されているが、実際もし銃器を使用することとなつたとして、下級武士を主体とした彼らに、一体、何丁・何門の銃器が用意できたであろうか？そして、火器を使わないと言つていた彼らも、実際の乱では大砲を奪取し歩兵營への攻撃を試みている。しかし自分達では全く命中させることができ

この図の中岡黙は岡山藩池田家の筆頭家老伊木家の元家臣であり、幕末期には筆頭家老伊木忠澄(三楽斎)とともに、長州征討や戊辰戦争に奔走した人物である。明治五(一八七二)年には陸軍に奉職し、明治九年には熊本鎮台の参謀となつていた。この図では中岡は受傷にもかかわらず力強い表情であるが、彼の伝記によるとこの傷により中岡は終生「常に肘を曲げ体を少しく前方に屈して歩行」という状態であり、実際には臍や背を斬る重症であつたようである。

中岡のこの傷は明治三十二(一八九九)年陸軍軍医学校に設置された日本初のレントゲン写真に残っている。当時



図3 中岡黙(左写真)と刀創図写真(右写真)の尺骨・肘関節、右腕の臍着がはつきりわかる

ず、まごまごしているうちに歩兵の反撃を受けてしまう。また神風連に襲撃された人物の一人、大田黒惟信は幕末、砲術家として知られていた。大田黒家に伝わる話では、襲撃時、たまたま用足しに起きていた大田黒惟信が廁の手ぬぐいを持っていた。それが神風連の部隊には、当時、六堤(ろくちようがらみ)と呼ばれていたリボルバー式拳銃に見えて、大田黒は襲撃の難を免れたといわれている。この話は他の逸話には全く見えず少し疑問もあるが、もし仮に事実とすれば、夜半とはいえ、拳銃と手拭いの区別も神風連にはつき難かつたといふことができる。

これらのエピソードから考えられるのは、彼ら神風連が銃器を執らなかつたのは、イデオロギイ上の理由ではなく、そもそも銃器が用意できなかった、あるいは銃器を使用する技術を持つ者が少なかつた点である。

そうした状況で彼らが頼りにできるのは、日ごろ慣れ親しんだ刀槍である。そして彼らが持てる武術の全てを使つて勝利しようとした姿が『神風連刀創図』からは読み取ることができ

今後は、彼らを思想的・宗教的な自死者というだけではなく、武士という闘争者の観点から再評価し、熊本で『連』と呼ばれる地域共同体での位置づけ、武術流派のつながり

本書文では、明治九年の神風連の乱の神風連の武術、武術流派、戦闘状況を整理し、彼らが四天流・雲弘流・寺見流といった熊本藩で伝承された武術流派を学び日本刀を主兵装として襲撃を行ったことを確認した。

その上で襲撃された鎮台兵の受傷状況を記録した『神風連刀創図』を元に

- ・顔、頸、肩といった上半身に創が集中していること。
- ・左腕を斬りが最も多く全創の一・九・六%をしめている。
- ・現代剣道でも使われている籠手面や古流の面斬り、二刀流の太刀筋が確認できる。

ことを明らかにした。

従来、神風連についての研究は彼らの形而上的・思想的な研究が中心であり、彼らの武装や武術についてはほとんど顧みられることがなかつた。

彼らの行動は非戦略的な暴発として捉えられ、あるいは

### 五 おわりに

央で機骨に癒着して治癒したとされる。思い出して感涙したとされる。

ており、又線写真と『神風連刀創図』を見た中岡は往時を

といった点からも研究を進めることが望まれる。

もう一つ、日本刀や槍といった武器は現代においては美術品や鑑賞品であり、これをどう利用し、実戦を戦ったかという点については、従来あまり注目されることがなかった。『神風連刀創図』は、実戦でどのように日本刀が使われたか、そして武士がどのようにに戦闘したかをはっきりと我々に教えてくれる点で、大変貴重な資料であると位置づけられる。

注

- (1) 彼らの行動を「乱」と呼ぶか「変」と呼ぶかについて、彼らは変革を求めた志士であるという名譽回復の視点から地元熊本では「変」と呼ぶべきとされている。本稿ではその観点について評価をしつつも、一般に贈答している「神風連の乱」の表記とする。
- (2) 『渾傷者図』陸上自衛隊彰古館には明治天皇の天覽に供された十枚の図が残る。
- (3) 谷川健一：一九六八
- (4) 渡辺京二：二〇一一
- (5) 大正七年の軍人医学大会については『読売新聞』(一九一八年三月三日朝刊)五面「軍陣医学 医学大会

年二月の西南戦争熊本城籠城に参加  
・人、47奥山政守：明治十(一八七七)年三月九日  
の西南戦争熊本城攻囲戦で死亡  
のように早い段階で戦線に復帰している者がある  
ことから、神風連の乱の発生後かなり早い時期に刀創図は描かれた始めたのではないと思われる。

- (8) 明治三十六年六月 植木弥三郎『明治九年神風党暴動時刀創図』表紙裏書(陸上自衛隊彰古館蔵)
- (9) 仮装下以降の原因には「1...」として図単位で漢数字の番号と原因の番号を区別するため、原因の番号を刀創図・1、刀創図・2(アラビア数字は原因の仮装下

の番号と一致とした。  
また、受傷者は名前により名寄せし「人、7松井萬蔵」「人、8酒井」と番号を振った。なお人名については原因では氏名が書かれている。本論文では歴史資料でもあり受傷者の医療記録でもあるという本資料の性格を鑑み、土官や、その後の経歴調査で記載が必要な人物については氏名を記載し、下士官などのその他の者は苗字のみの記載にとどめた。  
(10) 三浦煥：一八七六より

- (11) ただし、流れ弾による銃創の者が一名(人、30宮富)と一部、打撲痕らしい傷を有する者(人、36西村)がある。
- (12) 高久運 佐藤泰則 榎本友彦「他」：二〇〇七
- (13) 本論文では刃の走向を「大刀筋」とする。
- (14) 熊本地歴研究会：一九七四 一七
- (15) 石原勲男：一九三五 四八、六二、六六、七六
- (16) 石原勲男：一九三五 二七五、三〇二
- (17) 近世名将言行録：一九三四・三五 二九一
- (18) 村山真真『四天流撃剣士二十五人姓名録序』(古今文章評解 10巻)村山自彊著、奎文堂、明治十七年一月に収録)
- (19) 『武州忍領・大原傳七郎劍術修行帳』(寛政十二(一七九八)年)や『壬子邊遊日記』(嘉永五(一八五二年)など)に肥後や長崎県大村の四天流と稽古を行った記載が見える。
- 参考：長尾進：一九七七「寛政期における劍術廻国修行の実態とその意義」武州忍領・大原傳七郎劍術修行帳の分析を通して(明治大学教養論集 通巻293号(一九七七年一月))
- (20) 刀を縦に持ち上げ、顔の横の位置に柄を置く構え方。右においた場合は右八相、左に置いた場合は左八相。なお、文字や呼び名は流派によって異なる場合がある。

- (7) 防衛省防衛研究所蔵「2月27日 2月18日熊本鎮台近傍賊兵襲りし件 森軍曹 (QACR)アジア歴史資料センター」兵C908736900、来翰綴 明治十年二月五日「十年二月廿八日(防衛省防衛研究所)によれば、神風連の乱による負傷兵は、山鹿温泉で治療をしていた。しかし明治十年二月十四日西南戦争が勃発し、西郷隆盛軍が熊本に接近したことにより、負傷兵八十四名は大坂鎮台病院に避難をし、三月二日に大坂陸軍臨時鎮台病院に到着した。
- 石黒の覚書では、大坂臨時病院に移送したのちに描かれはじめたとなっているが、負傷者の中には・人、3中岡照：神風連の乱後、明治十(一八七七)

- (6) 五姓田芳柳(初代)(一八二七)年・明二五(一九二二年)は幕末期の洋画家。明治八(一八七五)年陸軍病院で解剖学御用掛を勤め、馬に関する解剖図を手掛ける。明治十年、西南の役に際して大坂臨時陸軍病院に出張を命じられ、石黒忠恵の指揮のもと多くの負傷者を写生し、のち『西南役大坂臨時病院負傷兵施術光景』(明治十四(一八八一年)東京芸術大学 大学美術館蔵)を制作した(日本大百科全書「五姓田芳柳(初代)」より)
- 討議の余暇に研究(を参照のこと。また、覚書は石黒忠恵：一九一八に拠った。

- (21) 寛永堅吾：一九三八 一〇・一一
- (22) なお、神風連資料館目録では猿渡の流派を「示現流」としている。しかし、薩摩藩の示現流あるいは業丸示現流は熊本には伝わっておらず、いずれも時習館で稽古された「寺貝流」の誤記・誤伝である。
- (23) 敵の刀を下から自分の刀で受けとめるとみせかけて、斜めに敵の刀を返らし切り込む技。一刀流など各流派に見ることができ。
- (24) 前田稔晴：一九三五『日本刀語』一八二・四
- (25) 石原龍男：一九三五 一五二 一
- (26) 神風連資料館：一九八七 一〇九
- (27) 安岡は逃走するも三日後に死亡。種田・高島は即死。
- (28) 歩兵管は砲兵管からは一〇〇m程度離れた位置にあり。ただし一の丸の方が場内で一段高い位置にあった。
- (29) 乱の戦闘状況の記述はおもに増田：一九九九によった。
- (30) 太刀筋の呼び方は流派によって異なっているため、今回わかりやすいように基準を設けた。
- (31) 九十八箇所傷のうち、二か所は銃創のため除く。
- (32) 石黒：一八七八によれば、神風連の乱・西南戦争で大阪軍臨時病院に搬送された截傷・刺傷の患者は計
- (36) 三浦煥：一八七六より
- (37) 増田隆久：一九九九 一六・一七
- (38) 長谷井千代松：一九七九
- (39) 防衛ホーム新聞社：二〇〇九 四一・四四
- (40) 荒木精之「神風連資料館設立の経緯」神風連資料館 一九八七 一五
- (41) 武士としての神風連を見場合、渡辺京一の「宇気比」に対する指摘は興味深い。神風連が決起の可否を宇気比に拠って定めたことについて、「彼らはとにかくにも武士であって、開化の大勢にもかかわらずとめて武士の自分を錬磨し保持しようとして来た人々である。武士が軍上の決定を、立てた権が右に倒れるか左に倒れるかといった占いに託すはずはない」(渡辺京二：二〇一一 二二三)として、彼らは他の士族の状況や神風連内部の不満を図りつつ、決起が成功するための時期を検討していたのであり、「宇気比」は信仰者としての最後の決断の様式であるとしている。この説の可否はさらに検討が必要ではあるが、「神風連刀創図」を見る限り暴発者ではなく、彼らの戦闘者として

- (21) 二八一名。主な受傷箇所は頭首七十二名(二五六%)、
- 軀幹四十四名(一五・七%)、上肢二三四名(四七・七%)、
- 下肢三十一名(一・〇%)となっている。この数値は神風連の乱での負傷者の数値も含まれるものであ
- るが、刀創に関しては頭・首・上肢といった部分の
- 受傷が多い傾向が読み取れる。なお、銃創の患者は計
- 五六一〇名。頭・首七〇五名(一二・六%)、軀幹八一八
- 名(一四・六%)、上肢二五三一名(四五・一%)、下肢
- 一五五六名(二七・七%)と、刀創とは全く異なる傾向
- が見られる。
- (33) 三浦利章「視覚的注意と安全性・有効視野を中心とし
- て」(照明学会誌10号(一九九八年三月))
- (34) 抜刀の方法によっては居合の状態であっても、左袈
- 褌斬りなど、右から左へ方向に斬ることも可能であ
- るので、全てが抜刀状態により斬りつけられたものと
- は限らない。特に人・竹田(刀創図35)については
- 頭部への抜き付けを思わせる切り口となっている。
- (35) 一刀で行う場合、創は平行ではなく交差あるいは全
- 然別の箇所につく可能性が高いものと思われる。上腕
- 部という狭い部位に平行して創がつくには、ほぼ同時
- に創をつける必要がある、可能性としては二刀でほぼ
- 同時に創をつけたものだと思う。推測ではあるが、
- 銃剣を腰か腹あたりに構えている鎮台兵に対し、左、
- (42) 石原：一九三五 二三四
- (43) 増田隆久：一九九九 一六
- (44) 大田黒重五郎口述「他」：一九三六 一〇九、
- 一〇。大田黒重五郎は大田黒権信の養子。
- 参考文献
- 石黒忠憲 一九一八「明治九年神風連動時刀創図
- 覽書」(陸上自衛隊彰吉館蔵)
- 石黒忠憲 一八七八『病院月誌摘要二』(陸軍文庫)
- 石原龍男 一九三五『神風連血涙史』(大日社)
- 大田黒重五郎 一九三六『思出を語る』(大田黒重五
- 郎翁逸話行会)
- 神奈川県立歴史博物館、岡山県立美術館 二〇〇八
- 『五姓田のすべて―近代絵画への架け橋』(神奈川県立
- 歴史博物館)
- 近世名将言行録 一九三四・三五『近世名将言行録』
- 熊本歴史研究会 一九七四『肥後武遺史』(書潮社)
- 神風連資料館編 一九八七『神風連資料館目録』
- 高久運、佐藤泰則、榎本友彦「他」二〇〇七『日本刀
- による創傷・明治9年神風連動時刀創図の考察』(防
- 衛衛生54(4)二〇〇七年四月 一〇九、一一三(防衛
- 衛生協会)

谷川健一 一九六八「神風連の神慮と行動形態」(初出「明治大学新聞」一九六八年一月十一日号。後に「谷川健一全集」二〇巻所収(富山房))  
 富永啓吾 一九三六「肥後藩に於ける雲弘流」(肥後武道史研究資料 昭和十三年十一月 肥後文教研究所)  
 長谷井千代松 一九二七「中岡少将小伝」(安永洋)  
 防衛ホムンズ新聞社編 二〇九九「彰古館」(防衛ホムンズ新聞社)  
 増田隆久 一九九九「神風党の姿」(たくま会)  
 三浦煥 一八七六「山県陸軍卿宛 神風連の乱報告」  
 明治九年十月二十六日(OZ)アジア歴史資料センター  
 タ1)R(C85)281803 明治九年 卿官房 中西国事  
 件密事日記十月(防衛省防衛研究所)  
 渡辺京二 二〇一一「神風連とその時代」(洋泉社)  
 調査協力ならび謝辞  
 本論文作成にあたっては以下の方々の方々の協力を得ました。  
 大塚則久先生、岡村毅先生、木村賢先生、高無宝良先生、安井万奈先生、松井浩様(神風連資料館)、鈴木英治陸曹(陸上自衛隊)

### 作られる女性性

#### 「女らしさ」は誰が作るか

##### 一 はじめに

ある授業の話し合いで、学生たちの意見が二にわたった。一つは「結婚はするべきか」というテーマで話し合っていたのだが、「結婚する時に、親が反対したらどうするか」という疑問が話し合いの中から生まれた。それに對して、ある女子学生は「親が反対しても結婚しなければいい」といった。この意見に対して、ある男子学生が「親が反対しているのに結婚するなんてどうかと思う。自分が家族の中で一人でも反対している人がいたら、いくら好きで反対していても別にいい」という意見をだした。そこで他の学生たちに意見を求めたところ、「親の反対で結婚をやめるまではいかないかもしれないが、ものすごく悩むと思う」という意見が多かった。「特に自分の親に反

### 倉石美都

#### 対されたら、(結婚は)無理かもしれないな、と思うけど、相手のことがものすごく好きだったら、一生懸命説得する

「ダメだというなら隠れて付き合う」「誰もいないところに多く出されるという結果になった。女子学生の方がむしろそれでもだめなら諦める」という意見が特に男子学生から出てきた。二人で逃げる」という考え方をしているようで、親の反対で結婚をやめるといふ意見を出した男子学生に対して「朝鮮時代じゃあるまいし」という意見を出した女子学生もいた。また、結婚前の同様に、賛成・反対を尋ねると、「結婚に失敗しないためには賛成。ただ、もし結婚せずに別れたら、同様していたことは、新しい恋人には言わない」といふ理由を聞くと、「相手が不愉快だろうから」といふのがほとんどだった中、ある女子学生が言った「女性として

先生方のご指導・ご協力をいただき本論文を完成させ

ることができました。改めて御礼申し上げます。また貴重な資料閲覧や見学の機会を与えてくださった以下の各機関についても御礼申し上げます。  
 ・陸上自衛隊彰古館、神風連資料館、岡山県立図書館  
 ・熊本県立図書館、新開大書館

# 現在のつぶやき

@Mito Kuraiishi  
 新型コロナ、犬にも感染するとかしな  
 いとか。ネットをみると、犬のマスク  
 やら消毒液やらくつやら売ってるけど、  
 マスクしてブーツはいてサンゲラマスク  
 で帰ってきたら消毒する犬…っつて、ど  
 うなんでしょう…

@Mai Takahisa  
 昔では「100日後に死ぬワニ」が話  
 題になっっている。グッズ販売や歌ま  
 で作られたそうなの。だが、自分にとっ  
 ては「数日後に訪れる原稿締切」の  
 ほろがドキドキする。脱稿したら誰  
 か歌作ってくれるかな。

## 現在学研究会則

【名称】 本会は現在学研究会と称する。

【目的】 本会は、新しい人文科学の学的世界を追求するために、  
 民俗学、文化人類学、社会学、地理学、歴史学など  
 に関する調査・研究を行う。

【事業】 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行な  
 う。  
 (1) 研究会の開催  
 (2) 会誌『現在学研究』の刊行  
 (3) その他本会の目的達成に必要な事業

【会員】 本会の目的に賛同する研究者は会員となることができ  
 る。  
 五 会員は所定の会費を納入するものとする。  
 【委員】 六 本会に次の委員を置く  
 (1) 運営委員 若干名  
 (2) 『現在学研究』編集委員 若干名  
 (3) 委員の任期は二年とし、再任をさまたげない。

【事務局】 七 本会の事務局は運営委員一名がつとめる。

附則 本会則は平成三〇年十月一日より施行する。

## 『現在学研究』投稿規定

一 投稿原稿は、民俗学、文化人類学、社会学、地理学、  
 歴史学など人文科学に関する論考・報告、その他と  
 する。  
 二 投稿原稿は四〇枚以内(四〇〇字詰め原稿用紙)を原  
 則とする。  
 三 投稿原稿の締切は、原則として毎年二月末日と八月末  
 日とする。  
 四 投稿原稿の提出先は、現在学研究会事務局とする。  
 五 投稿原稿の採否は、編集委員会において決定する。  
 六 その他、必要な事項は編集委員会において決定する。

## 現在学研究 4号

2020年 3月31日発行

## 現在学研究会

〒145-0072 東京都大田区田園調布本町16-12-101  
 高久舞 方  
 cnishi\_hiroba@yahoo.co.jp

## 編集後記

『現在学研究』4号をお届けする。  
 東京オリンピックだ、新型コロナだ、と落ち着かない中、  
 なんとか『現在学研究』4号を出すことができ、胸をなでおろ  
 している。オリンピックという世界各国から、スホーロン精  
 神に則り戦おうという選手たちが集まるという祭典の年に、  
 新型コロナウイルスに悩まされお互いの国の往來を自粛しようという  
 皮肉な状態である。こうした「何か特別なこと」があると、日  
 本人は、〇〇人は、〇〇人、という言い方で国単位でくらわれることが  
 増える。現在の日本の抱える問題と共に日本人とは何かを考え  
 るいきっかけになるともいえる。  
 本号ではそうした現在の日本が抱えている問題や、これま  
 で考えられてきた日本人像、韓国人像に迫るような論考を掲載  
 することができた。歴史的資料の見直しからの新しい分析やこ  
 れからの課題、現在の日本が抱える問題、韓国における女性の  
 変化などが論じられている。  
 さまざまな視点から、目まぐるしく変わっている「現在」  
 ーいま、ここーを見つめ、「現在」を記録しながら、残せるよ  
 うな論考をこれからもお届けしたい。

(倉石美都)